

<b>Title</b>	現代英語の音変化
<b>Author</b>	中郷, 安浩
<b>Citation</b>	人文研究. 17 卷 11 号, p.1061-1072.
<b>Issue Date</b>	1966
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学会
<b>Description</b>	故吉田教授追悼号

Placed on: Osaka City University Repository

# 現代英語の音変化

中 郷 安 浩

英語は Mod E 初期に「大母音推移」(The Great Vowel-Shift) と呼ばれる、著しい音韻変化を受けたが、この変化はその時期だけに止まったわけでは決していない。それ以後も徐々にではあるが、定着することなく、今日まで続いて来た。とくに今世紀に入ってからは「第二の大母音推移」とも呼べるであろう音韻変化が RP (Received Pronunciation) 内部に起りつつある。A. C. Gimson は *An Introduction to the Pronunciation of English*, London (Edward Arnold (Publishers) Ltd.), 1962. において、RP の新しい傾向を詳細に記述している。また、1964年にも Gimson は David Abercrombie その他の編集による *In Honour of Daniel Jones*, London (Longmans) において、“Phonetic Change and the RP Vowel System” という論文を発表し、RP の傾向を母音だけにしぼって論じている。これと同じ年、すなわち1964年に Charles Barber は *Linguistic Change in Present-day English*, Edinburgh & London (Oliver & Boyd) を著わした。これはその題名からも見当がつくように、現代イギリス英語の新しい傾向を取扱ったものである。ここで新しい傾向というのは、過去数10年 (the past few decades) の間に標準イギリス英語に見られる傾向の意味である。Barber のこの本の内容は

Linguistic Change  
Standard English and Dialect  
Changes in Pronunciation  
The Growth of Vocabulary  
Changes in Meaning  
Grammatical Changes

という章に分けられている。中でも総154頁のうち、その約三分の一にあたる56頁に、Changes in Pronunciation の章が割当てられており、RP の新しい傾向を知る上に実際的な好資料を提供している。この本は前述の Gimson の *An Introduction to the Pronunciation of English* よりも2年遅れて出版されたものではあるが、Barber が Gimson のこの書物を入手した時は、時間的に自分

の本に利用する余裕がなかったと言っており、Barber は Gimson のものを参考にはしていない。Barber は RP を BBC 放送のアナウンサーに多く求めているが、それをさらに、BBC アナウンサーの中でも RP あるいは教養ある南西部英語を話す人に限っており、また、BBC アナウンサーだけしか用いないと思われる発音の例はあげていないと言っている。

それに対し、Gimson の方は、*An Introduction to the Pronunciation of English* において、イギリス英語の発音をまず大きく regional と received に分け、それをさらに、前者は educated, popular, modified に、そして、後者を conservative, general, advanced に分けている。本稿は RP に関することを問題としているのであるから、regional についての説明は以下省略するとして、RP についてさらに述べると、conservative というのは比較的年輩者の発音、general は最も一般的な発音で、BBC 放送で用いられているもの、そして advanced は主として上流階級の若い年齢層に用いられているものというように分けられる。

Barber と Gimson を比較した場合、きめの細かさという点では Gimson の方が遙かに程度が高いと言うことができる。Barber が RP の新しい傾向として触れているものの中には、Gimson が advanced としているものも相当含まれているようである。別の見方をすると BBC 放送のアナウンサーの中にも advanced form を用いる者が少からずあり、general と advanced の差が次第になくなりつつあると言うこともできるであろう。

Gimson が “Phonetic Change and the RP Vowel System” で取扱っていることであるが、RP ではとくに母音には著しい変動が見られる。これは何も Gimson や Barber が初めて言い出した事ではない。それ以前に Daniel Jones によってもいくつか指摘されている。Gimson は Jones が *An Outline of English Phonetics*, 1956 で述べた、最近 3~40 年間に RP として広く行われるようになった主な母音の変動を次のようにまとめている。即ち、

- (i) /I, e, æ/ の二重母音化 > [i<sup>ə</sup>, e<sup>ə</sup>, æ<sup>ə</sup>] (*did, head, bad*) ;
- (ii) /æ/ の長音化 = [æ:] (*bad, bag*) ;
- (iii) ロンドン方言 /ɔ:/ = [ɔ:<sup>(1)</sup>] (*saw*) ;
- (iv) 南部英語の /u/ の平母音化 = [ʊ] (*good*) ;
- (v) ロンドン方言 /ɜ:/ = [ɛ] (*fur*) ;
- (vi) 南部英語 /ɔ:/ の /ɔə/ (*more*) 及び (時には) /uə/ (*poor*) との合体;
- (vii) ロンドンでの /eɪ/ の単母音化 = [ɛ:] (*day*) ;

(viii) 南部英語における /ou/ の第一要素 = [əˠu] (*go*) ;

(ix) /eɪ, aɪ, aʊ/ + /ə/ の [eˠə, aˠə 又は aɪ, aˠə 又は aɪ] (*player, fire, tower*) への簡約化。<sup>(2)</sup>

Gimson や Barber はこれだけに止まらず、もっと広範囲にわたって、かなり著しい母音の変動を示している。本稿は Gimson と Barber を主たる資料とし、それに Jones を加えて RP における母音の変動の主なるものを述べることを目的としたものである。

### /i:/ と /u:/ の二重母音化

これらはとくに語尾で [iɪ], [uɪ] となって二重母音化されることが多い。語尾以外にも二重母音を使う人もあるにはあるが、多いとは言えない。しかしながら、この二重母音化は語尾以外の個所にも波及するであろうことは十分に予想される。<sup>(3)</sup> 語尾においては二重母音化は今日では全く普通で、Gimson は語尾においてこれらを二重母音化せず、純粹の母音を用いることは *over-cultivated* の典型だとしている。<sup>(4)</sup>

/i:, u:/ において [əi:], [əu:] といったヴァリエーションを用いる人達も、<sup>(5)</sup> 教養ある、とくに若い年齢層にあるが、これは *substandard* とされる。

### 語尾の /ɪ/ > /i:/

*lady* や *property* のような語尾の無強勢音節に /ɪ/ の代りに /i:/ が聞かれることは、アメリカ英語やロンドン、オーストラリア、アイルランドはじめ方言に多くあることだが、RP でも /i:/ が好まれるようになってきている。しかし、Barber によると、狭義の RP 話者、例えば *public school* 出身者からは聞かれない。<sup>(6)</sup> その代り、彼等は /ɪ/ を少し広げて、/e/ に近く発音する。これは、Gimson が、無強勢音節で [e̞] <sup>(7)</sup> としているものに相当する。語尾に /i:/ を用いる RP 話者は、その多くが /i:/ を二重母音化する人々である。/ɪ/ の代りに /i:/ は、語尾ばかりでなく、*educated speech* でも、他の場所においてもよく聞かれる。BBC では *between, eleven* を /bi:ˈtwi:n/, /i:ˈlevn/ とすること<sup>(8)</sup> がある。しかし Barber は、これは *overcareful* とみなし得ると言っている。

### /æ/ の長音化

もともとは短母音である /æ/ は、ある音声環境においては特に長音化される傾向にある。すなわち、/b, d, g, dʒ, m, n/ の前では [æ:] となる。これは

RP において質的に /e/ と /æ/ が近づいたため、長さがその両者を判別するための、補助的な distinctive feature となっている。<sup>(9)</sup>しかしながら、[æ:] という長音を用いず、[æ<sup>ə</sup>] という二重母音を用いる RP 話者もある。

/ɔ:/ > [ɔ]

Jones では舌の高さは between half-open and open, 唇は between open and close lip-rounding, 両あごの開きは medium to fairly wide となっているが、<sup>(10)</sup>近年では下あごの開きが少く、舌が高くなって、基本母音 [ɔ] よりも狭く、[o] に近い [ɔ̃] あるいは [ɔ] に移行している。<sup>(11)</sup>その結果、[ɔ:] は old-fashioned upper-class speech の特徴となりつつある。<sup>(12)</sup>

/ʌ/ > [ä]

Jones は half-open としているが、現在は従来の [ä] よりも、かなり開いた、前寄りの低い所で発音されるようになって、基本母音 [a] の方向に動いている。<sup>(13)</sup>これには Jones も触れていて、more “advanced” と言っているが、現在では広く行われていて、RP としては、むしろこれが普通となっている。Gimson はさらに詳しく、これが明かにロンドン英語の影響であるとして、/ʌ/ が [ä] となった結果、/ɑ:/, 語尾以外では [ä] となった /ɑʊ/, 語尾以外で [ä:] 又は [ä:] となった [ar] と音質的に近くなったため、*bun* と *barn*, *luck* と *lark*; *ton* と *town*, *hull* と *howl*, *bud* と *bowed*; *bud* と *bide*, *pun* と *pine*, *suds* と *sides* などがお互いに似てきたと言う。その結果、/ʌ/ は従来の /ɜ:/ とは音質の上で近似ではなくなっている。<sup>(14)</sup>

Barber はこの変動は今のところまだそれほど極端にまで進行してはおらず、open central sound であると述べているが、これは [a] まで進行しておらず、Gimson と同じく [ä] と言うに等しいであろう。<sup>(15)</sup>

/ʌ/ が [ä] となったため、質的には /æ/ に近くなったわけだが、*hut* と *hat* は明らかに対立していて、これらは homophones とは言うことが出来ない。しかし、*hut* を /hət/, *hat* を /hat/ としていた従来の音素表記としては、前者を /hat/ とし、後者を /hæt/ とし、/æ/ なる音素を独立させる必要が生じてくるであろう。

無強勢音節に /ə/ が広がる

強勢のない母音があいまい母音化する傾向は、英語の特徴の一つとなっている。

これは20世紀に入ってから起った新しい変動では決してないのであるが、今までこのあいまい母音化が及ばなかった所にまで進行しつつあることは事実である。次に比較的新しいと思われるあいまい母音化の現象を調べて見る。先づ、最も一般的なものは、/ɪ/ においてである。problem, possible, interesting, believe は現在では /'prɒbləm, 'pɒsəbl 'ɪntrestɪŋ, bə 'li:v/ が普通の型で、/'prɒblɪm, 'pɒsɪbl, 'ɪntrɪstɪŋ, br 'li:v/ とするのは保守的であると Gimson は言う。Jones の *English Pronouncing Dictionary* (12th edn) では、これらのうち、problem と possible は /ə/ を最初に示して、/ɪ/ を [ ] に入れ、interesting と believe に関しては、/ə/ より /ɪ/ に frequency を与えているが、これらも /ə/ に frequency が与えられるのは、そう遠いことではないだろう。Barber は例として system, exact, ability, corporate, become, remain, horrible, waitress, kitchen を挙げているが、このうち、Jones が primary なものとして /ə/ としているのは horrible だけで、あとはすべて /ɪ/ を最初に示し、secondary なものとして exact には /e/ を与え、corporate と waitress には、secondary なものは与えていない。残りのものには [ ] に /ə/ を示している。Barber は、なお、BBC から聞いた women, useless, engine /'wɪmən, 'ju:sləs, 'endʒən/ はいく分奇異な感じがしたと述べている。これらは Jones にはすべて /ɪ/ とされている。しかし、これらの語でも useless を除いては、アメリカでは少なくとも奇異とは感じられないようである。Kenyon = Knott, *A Pronouncing Dictionary of American English* では engine には /ə/ のみ、women には /ɪ/ と /ə/ を示している。

/ɪ/ が /ə/ にあいまい化される傾向があるとは言え、affect, effect; allusion, illusion; accept, except; sitter, city; matterd, matted のように ambiguity を生ずるものには /ə/ と /ɪ/ の対立を保とうとする力が働いている。ただし、このうちでも city を /'sɪti:/ というように、語尾の無強勢 /ɪ/ を /i:/ とする RP 話者には /ə/ と /ɪ/ の対立ということはあてはまらない。

その他 Barber のあげている例には、

/e/ > /ə/ September /səp'tembə/, implement (v) /'ɪmpləmənt/ (これは名詞 implement からの類推) ;

/æ/ > /ə/ handicapped /'hændɪkæpt/, diplomat /'dɪpləmət/; enthusiast /ɪn'tʊ:zɪəst/;

/ɔ/ > /ə/ boycotted /'bɔɪkətɪd/, corridor /'kɔrɪdə/ ;

/ʌ/ > /ə/ sawdust /'sɔ:dəst/, income /'ɪnkəm/ ;

/eɪ/ 又は /ɪ/ > /ə/ candidate /'kændɪdət/ <sup>(16)</sup>

このあいまい母音化はアメリカ英語をはじめ、アイルランド英語やオーストラリア英語ではもっと進行しており、接尾語 -es, -ed, -ness にも及んでいる。Barber によれば、アメリカ英語やオーストラリア英語では、*minute* や *damage* にも /ə/ が行われているが、これは RP ではまず考えられないことだと言う。<sup>(20)</sup>

### 二重母音の平板化

/aɪ/

Barber はこれを much educated speech では以前より後退した位置にあり、基本母音 [a] よりも [ɑ] に近いところから始るので [aɪ] と表記した方が良いとする。しかし、Barber は自分自身この [aɪ] が広がりつつあるのかどうかよくわからない。ただ自分にはそう聞えるだけであるとも言っている。Jones によると /aɪ/ の第一要素を、外国人の中にはあまりにも [ɑ] に近く発音する人々があるが、それは方言的に聞えると言う。もしもこの [aɪ] が educated south-eastern speech で勢力を持ってきているとすれば、それはおそらくロンドン英語の影響であろう。Barber は *fire* のような /aɪ + ə/ が平板化して、[a<sup>ə</sup>] あるいは、さらに [a:] となるという事実には触れている。ところで、Gimson は [æɪ] 又は [aɪ] で表わされる /aɪ/ は popular London speech では最初の要素が [ɑ] 又は [ɒ] となり、これは Cockney vulgarism と言えるが、教養ある RP 話者の間にも広く聞かれるという。<sup>(23)</sup> しかし、Gimson が RP の傾向として見ているのは、すべての位置で /aɪ/ が [a<sup>ə</sup>] 又は [a:] になるというものである。そして、*sigh, diehard, side ; fire, society, liable ; highest, by all means ; tile, trial* を例としてあげ、[a<sup>ə</sup>] 又は [a:] として表記される /aɪ/ の傾向を示しているのである。<sup>(25)</sup> そうなると、*bide* と *bud, sign* と *sun* の差は僅かに長さによる違いだけという結果になるのである。すべての位置で /aɪ/ は [a<sup>ə</sup>] 又は [a:] になるとは言え、[ɪ] すなわち dark l の前では [ɪ] の要素は [ə] 又は [ʊ] となって、[ɪ] へのわたり音 (glide) となる。例えば、*pile* は [pa:<sup>ə</sup>ɪ] となる。<sup>(26)</sup> Jones も /aɪə/ が [a<sup>ə</sup>] 又は [a:] となる傾向を示しているが、dark l に先行する場合、例えば *trial* においては、[a<sup>ə</sup>] 又は [a:] とはならず、[traɪl] となる傾向があるが、*trial* の後に母音が続く場合は dark l が表われないので、*trial ended* の *trial* は [tra:<sup>ə</sup>l] 又は [tra:l] であると言う。<sup>(27)</sup>

このように /aɪ/ だけでなく、/aɪə/ も [a<sup>ə</sup>] 又は単に [a:] として表わされるようになってくると、*fire* と *fire* が homonyms という結果を生じてくるし、

*fie, fire* 及び *far* との差異も非常に僅かということにもなる。

Jones は /aɪ + ə/ の [a:] となる傾向は、子音が後続する場合には特に強いとして、*fiery, society, entirely, violin, giant, hire it* をあげている。ただ、/ə/ が接尾語である場合、例えば、*higher* や *dyer* のような場合は、[a:] にはならず、[aɪə]<sup>(28)</sup> を使っていると述べている。

## /aʊ/

これは /aɪ/ の場合と同じことが言える。Jones は *tower* の従来の型を [tauə] で示し、これが、[a<sup>o</sup>] あるいは [a:] になると言う。Barber も同じ型で表わしているのだが、さらに [a:] もつけ加えている。Barber はこの二重母音が単純母音化するのに条件をつけており、/aʊ/ が /ə/ に先行する場合、すなわち /aʊ + ə/ の場合であるとする。そうなると *tire* と *tower* は [ta<sup>o</sup>] 又は [ta:] となり、全く見わけがつかなくなってしまう。これには表記法の問題も関係してくる。すなわち、Barber はいわゆる broad notation を用いているからである。Jones はこのような場合、[a:]<sup>(9)</sup> を用い *power* を [pa:] で示す。従って *tiring, towering, tarring* は ['ta:riŋ], ['ta:riŋ], ['ta:riŋ] で示されるが、この [a:], [a:], [a:] は音質の上では極めて近似である。ところで、Gimson によるとこの二重母音の第一要素はロンドン英語やその他の方言では基本母音 [a] 又は [æ] に近いが、RP では後寄りの [a] に近いというから、<sup>(30)</sup> 上にあげた Jones や Barber の [a] はすべて [a] と改めるとすれば、*tiring* は ['ta:riŋ] のまま残しておくとして、*towering* と *tarring* は homophones ということになる。

Gimson によると、すべての音声環境において /aʊ/ > [ä·ʷ] 又は [ä·<sup>o</sup>] 又は [ä:] となる。そして、例として、*cow, loud, allow; tower, nowadays, coward; now and then; how else, now or never; towel, foul* をあげ、/aʊ + 母音/、また、時には /aʊ/ が /a: / のレベルにまで移行し、*tower* と *tar; shower* と *Shah; coward* と *card*; さらに *vows* と *vase; down* と *darn; loud* と *lard* でさえも homophones となると言っている。さらに、単母音化が進行すると、*shire, shower, Shah; tired, towered, tarred* の /aɪə/, /aʊə/, /a: / が同じレベルにまで達する<sup>(31)</sup> という。表記法の差はあるが、Jones も Gimson も、そして Barber も同じことを言っているのである。

## /oʊ/

これは20世紀になって最も著しい変化をしたもので、二重母音の第一要素が、

極端に中央に寄り、両唇の丸めは失われ、[ö̯], さらには、とくに最近では、あらゆる音声環境において、[ə̯] 又は単に [ə:] となる傾向が見られる。Gimson によればこの単母音化は、ほどなく general になるであろうと述べている。<sup>(32)</sup> Gimson は *Introduction* ではすでに /əʊ/ を用いているのであるが、この二重母音の第一要素が相当長く、/oʊ/ と /ɜ:/ の間に混同を生じ、*bone* と *burn* が homophones になることが少くない。特に [ɪ] の前では /eʊ/ と /ɜ:/ の区別がつきにくくなるため、*goal* と *girl*; *pole* と *pearl* が homophones となることも多い。また、/oʊ/ が /ə:/ となり、/ɜ:/ が弱められると、*slow* と *slur* は *slow up* と *slur up* のように r-linking によって明らかに区別出来る場合以外にはその区別もつかなくなり、*slow* と *slur* は homophone となる可能性がある。*bone* の [ə:] と *burn* の [a:] 又は [æ] は、わずかの差で区別され、また、[a:] 又は [æ] が /ɑ:/ で表わされた場合でも *barn* の /ɑ:/ に retracted form を用いることによって *burn* との差違を保持することが出来る。<sup>(34)</sup> しかしながら、実際問題として、*bone*, *burn*, *barn* は非常に似通ったものとなることには違いないようである。

#### /eɪ/

/eɪ/ においても、glide が短くなり、[e̯] あるいは [e:] のように平板化される。この /eɪ/ の平板化は、二重母音の平板化のうちでも最も著しいものの一つである。方言の多くには /ou, eɪ/ の代りに /oɪ, eɪ/ を持つものが少くないが、RP の場合には、/ou/ がいまだ /əʊ/ の段階を脱し切っておらず、二重母音の形を止めている時、/eɪ/ の平板化は相当進行していると言えよう。この傾向のため、*men* と *main*; *edge* と *age*; *sell* と *sail*; *tell* と *tale* の差は辛うじて [e̯] の長短によって支えられるということになる。<sup>(35)</sup>

Jones は同じ現象を [e̯] で表わし、これは比較的最近の傾向で、RP 話者の間で一般化しつつあると言う。<sup>(36)</sup> これはまた [e:] にまで単母音化することもあり、BBC 放送のアナウンサーの発音に *today* を [tə'deɪ] あるいは [tə'de:] というのがひんぱんに聞かれる。<sup>(37)</sup> Jones は [e̯] で表わしているが、Gimson の [e̯] は [e] の open quality を表わすものであるから、表記法は違っているが、同じことを述べているのである。

また、*conversation* などの語における /-eɪfən/ の /eɪ/ を *session* などにおける /e/ と質的にも量的にも同じレベルにまでする人々もある。<sup>(38)</sup>

/eɪ/ + /ə/ が [e̯ə] になることは以前から知られてはいたが、Jones によ

ればこれははっきり [ɛə] と区別されるべきであるとされている。<sup>(39)</sup>ところが、Gimson によると、/eɪ/ + /ə/ は [ɛ̄·ə], [ɛ̄·ə] となり、/ɛə/ と同じレベルになることによって、*they're* と *there, layer* と *lair* なる homophones を生ずることになる。<sup>(40)</sup>

## /ɔɪ/

この二重母音の傾向に関しては Jones や Barber は触れていないようである。Gimson によると、語尾では [ɔ̄·ɪ] 又は [ɔ̄·ë], 有声子音 (特に [ɪ]), あるいは母音の前では [ɔ̄:] となる。その結果、*tall* と *toil; gnaws* と *noise* は似てくるが、この /ɔ:/ と /ɔɪ/ の対立は、前者を [ɔ̄:] というせまい母音で発音することによって区別され、*coil* と *coll; loyal* と *loll* のように [ɪ] の前では、<sup>(41)</sup> /ɔɪ/ = [ɔ̄:] と /ɒ/ は主として長さによって区別されることになる。

## /ɔə/

Jones も述べているように、(Jones 自身をも含めて) RP 話者に /ɔə/ を全然用いずに、<sup>(42)</sup> /ɔ:/ を用いる人が多い。実際、RP では /ɔə/ はほとんど /ɔ:/ にとって代られたと見てよいようである。Gimson などは *Introduction* では /ɔə/ を見出しに用いず、/ɔ:/ をあげているくらいである。このように /ɔ:/ が従来の /ɔə/ の代行をするようになった結果、*sore* と *saw; pour* と *paw; court* と *caught* が homophones となってしまった。Jones の *English Pronouncing Dictionary* (12th edn.) でも、すべて /ɔ:/ が用いられ、/ɔə/ は rare として [ ] の中に入れられている。

## /ʊə/

/ɔə/ が /ɔ:/ に完全にとって代られるようになると、/ʊə/ の第一要素を少し低めて [ɔ̄] に近いところから始めて、[ʊə] の代りに [ɔ̄ə] としても従来の /ɔə/ と混同を起す心配がなくなり、そのように [ɔ̄ə] にまで低められることになる。ここまでくると、前者の轍を踏むことは当然考えられることである。すでに *poor, pore, paw; sure, shore, Shaw* を /pɔ̄:/, /ʃɔ̄:/ とする RP 話者もあるという。<sup>(43)</sup>

さらに、/ʊ/ は今では /u:/ = [uu] よりも、<sup>(44)</sup> /ɔ:/ = [ɔ̄:] に近いので、*could* と *cord; foot* と *fort* はかなり近似値ということになる。

/ɪə/

*hear, dear* のように、とくに語尾において、二重母音 /ɪə/ の第二要素の sonority が高くなり、/ɪ-ə/ のように二音節となって、それが、強くなると、/ɜ:/ 又は /ʌ/ あるいは /ɑ:/ とさえなることがある。その結果、*hear, dear* はそれぞれ /hjɜ:/, djɜ:/ 又は /hja: = [çɑ:], dja:/ となる。<sup>(45)</sup> これらのうち、Gimson は /ɑ:/ を affectation としているが、事実の上では、RP 話者に /ɑ:/ を持つ人は多いようである。

/ɪə/ はある音声環境では /εə/ と同一になることがある。無声子音あるいは [ɪ] に終る音節では /ɪə/ と /εə/ の対立はなくなり、*really* も *rarely* も [ˈrɛəli] という homophones となる。<sup>(46)</sup> しかし、これは *rarely* を [ˈrɛ:li] とした場合には解決される問題である。

/εə/

これは [ɛ·ə] 又は [æ·ə] で表わされるが、non-final の音節では、[ɛ:] となることがある。例えば、*careful, rarely* は [ˈkɛ:fl], [ˈrɛ:li] とされる。そうになると、現実には [æ:] 又は [æ·ə] として実現される /æ/ と音質の上で似てきて、advanced RP では、*bared, fared, paired* が *bad, fad, pad* とまぎらわしくなり、さらに、/eɪ/ + /e/ と似てくることになり、*layered, laird, lad* の区別が困難となる。<sup>(47)</sup>

その他の母音

/ɔ:/ と /ɒ/

*cross, toss, soft, off, often, cloth, broth, frost* 等における /f, θ, s/ に先行する *o* は /ɔ:/ 又は /ɒ/ の両形を有するが、比較的若い年令層の間では /ɒ/ が圧倒的に優勢となりつつある。これはなにも今世紀になって現われ始めたものではなく2世紀前から /ɔ:/ と /ɒ/ が平行して行われて来たもので、単に /ɒ/ の方が好まれるようになったに過ぎない。また、/f, θ, s/ に先行する *o* だけが /ɒ/ になるわけではない。例えば Gimson の言うように、*Australia, Austria* のように *au* においても /ɒ/ が好まれるようになっている。しかし、*fault* や *salt* においては /ɔ:/ が好まれている。

*horse, fourth, sauce* などにおいては /f, θ, s/ に /ɔ:/ が先行するとは言っても、/ɒ/ になることは決してない。

/ju:/ &gt; /u:/

これは16-7世紀以来の現象で、20世紀に新しく起ったものではなく、*chew, June, rule, blue*のように /tʃ, dʒ, r/ 及び子音 + /l/ の後ではすでに早くから /u:/ が用いられており、その他の位置では *music, pew, due, huge* のように /ju:/ が残った。中には /ju:/ と /u:/ の両形が聞かれるものがあり、/u:/ の勢力が拡がったのはこの形のものである。Barberによると、

/s/ の後 : *suit*/θ/ の後 : *enthusiasm*/z/ の後 : *resume*initial /l/ の後 : *lute*無強勢母音の先行する medial /l/ の後 : *absolute*

ちなみに、Jones, *English Pronouncing Dictionary*, 1963, 12版によれば、上例のうち、/ju:/ を先行させているものは *suit, enthusiasm, resume* であり、/u:/ を先行させているものは *lute, absolute* であり、後二者においては /ju:/ がすでに less frequent になっていることがわかる。この変化はイギリスよりもアメリカにおいて著しいという事はあまりにも有名な事実である。

以上のように、RP 母音の変動について十分言いつくしたとは言えないが、主なものには一応触れてみたつもりである。現在の段階で、RP 母音が、以後どのような経過をたどるであろうかを予想することは少々危険ではあるが、その危険を取って冒すとすれば、二重母音が単音化するという傾向から見て、長さ、すなわち quantity が distinctive feature として重要な位置をしめるであろうということが言えるであろう。音質の上ではすでにいくつかの homophones を生じてきている。アメリカ英語との差は今のところますます広がって行くようである。そして、綴字を発音に一致しない点が多いという英語の notoriety はますます助長されることになるようである。

## 註

- (1) [ɔ:] は open quality の記号。すなわち [ɔ:] は [o:] よりも広い音をあらわす。
- (2) A. C. Gimson, "Phonetic Change and the RP Vowel System", *In Honour of Daniel Jones*, London (Longmans), 1964, p. 133.
- (3) Charles Barber, *Linguistic Change in Present-day English*, Edinburgh

- & London (Oliver & Boyd), 1964, pp. 44-45.
- (4) A. C. Gimson, *An Introduction to the Pronunciation of English*, London (Edward Arnold (Publishers) Ltd.), 1962, p. 95.
- (5) Barber, *op. cit.*, p. 45. (6) Barber, *op. cit.*, p. 46.
- (7) Gimson, *Introduction*, p. 97. (8) Barber, *op. cit.*, p. 47.
- (6) Gimson, *op. cit.*, p. 101.
- (10) Daniel Jones, *An Outline of English Phonetics* (9th edn.), Cambridge (W. Heffer & Sons Ltd.), Maruzen rept., 1960, p. 79.
- (11) Gimson, *op. cit.*, p. 108. (12) Barber, *op. cit.*, p. 42.
- (13) Jones, *op. cit.*, p. 86. (14) Gimson, "Phonetic Change", p. 136.
- (15) Barber, *op. cit.*, p. 42. (16) Gimson, *Introduction*, p. 97.
- (17) Barber, *op. cit.*, p. 49. (18) Gimson, *op. cit.*, p. 97.
- (19) Barber, *op. cit.*, p. 49. (20) Barber, *op. cit.*, p. 49.
- (21) Barber, *op. cit.*, p. 42. (22) Jones, *op. cit.*, p. 105.
- (23) Gimson, *op. cit.*, p. 125. (24) Gimson, *op. cit.*, p. 134.
- (25) Gimson, *op. cit.*, p. 124. (26) Gimson, *op. cit.*, p. 124.
- (27) Jones, *op. cit.*, pp. 106-7. (28) Jones, *op. cit.*, p. 106.
- (29) [-] は retracted quality をあらわす。すなわち [a] は [a] よりも奥の音。
- (30) Gimson, *op. cit.*, p. 131. (31) Gimson, "Phonetic Change", pp. 134-5.
- (32) Gimson, *Introduction*, p. 85.
- (33) ロンドン英語やその他の方言に見られることであるが, milk が [mrɪk] となるように, [ɹ] が glide となり, [v] と混同を起すことを言う。
- (34) Gimson, "Phonetic Change", p. 134. (35) Gimson, *ibid.*
- (36) Jones, *op. cit.*, p. 100.
- (37) Jones, *The Pronunciation of English* (4th edn. revised and enlarged with further corrections), Cambridge (University Press), 1963.
- (38) Gimson, *op. cit.*, p. 134. (39) Jones, *Outline*, p. 101.
- (40) Gimson, *op. cit.*, p. 134. (41) Gimson, *op. cit.*, p. 135.
- (42) Jones, *op. cit.*, p. 116. (43) Gimson, *op. cit.*, p. 134.
- (44) Gimson, *op. cit.*, p. 134. (45) Gimson, *Introduction*, p. 137
- (46) Gimson, "Phonetic Change", p. 135. (47) Gimson, *ibid.*